アンドレ・ブルトンにおけるシュルレアリスムと現実

Surrealism and reality in André BRETON

加　藤　彰　彦
Akihiko KATO

［要旨］
アンドレ・ブルトンの言う超現実は夢と現実の弁証法的な融合であるとされ、夢については『シュルレアリスム宣言』や『通底器』において考察されているのであるが、現実においてはそのような考察はなく、その点に注目し、現実についての考察を試みたのが本論考である。現実を対象として捉えた場合、様々な問題点が存在し、サルトルの言う対他存在、誰が現実を捉えるのかという視線の問題、現実を再構成する記憶の問題ということから、客観的現実は存在しないと第一部で結論付けた。その上で現実を捉える主体の問題、「私」を成立させるためのヘーゲルの言う承認の問題から、ラカンを援用しながら、「私」の語る現実とは物語であると、第二部において論証した。以上のことから、物語という観点から夢と現実を捉え、超現実へと繋げていく可能性を示唆した。

［キーワード］
アンドレ・ブルトン、シュルレアリスム、現実、物語

序章

アンドレ・ブルトンは1924年に発表した『シュルレアリスム宣言』において、超現実なる言葉を用いて「夢と現実である、見たところ非常に対立した、これらの二つの状態の、ある種絶対的な現実、仮にこのように言うことができるとするなら、超現実（下線原文）への、未来の変化」（PI p.319）という表現をしている。これはブルトン自身明らかにしているように、ヘーゲルの弁証法の影響下にある考えと思われるし、実際1924年に刊行された『失われた足跡』の中に収録されている1922年に『文学』新シリーズ第二号に発表された「全てを棄てよ」の中には次のような記述がある。「今日では、全てのものがその反対に沈殿し二つとも唯一の範疇に溶解する、その唯一の範疇はそれ自体最初の項と両立し得て精神が絶対観念、全ての対立の両立と全ての範疇の一体性に到達するというところまで以下同様にという思想を人は手に入れている。」（PI p.262）

ここにおいて我々は、超現実について夢と現実が弁証法的に合一して成立するものであるという理解を得るわけである。我々の目標は超現実にあるわけだから、その理解のためには弁証法という方法を検討するとともに、前提として提示されている夢と現実にも目を向けなければならない。ブルトンはこの『シュルレアリスム宣言』においても夢に言及しているし、1932年に初版が発行された『通底器』においては様々な夢の研究を参照しながら論を進めているし、ブルトン自身の夢の分析も行なっているのだ。ところが弁証法的に捉えられるべき対立する二

項の一項である現実については、改めて論じるという作業がなされていない。当然の諒解事項であるかのようだ。『シュルレアリスム宣言』のまさに冒頭は次のようになっている。「生活への信仰は、その生活がよりかりそめに持っているもの、現実の（下線原文）生活がどういうものであるかが理解されるところまで行くと、結局のところこの信仰は堕落する。人間、この決定的な夢想家は、日に日に自分の運命に不満足になり、彼が用いることを余儀なくされた物をやっとのことで一通り見ることになるのだ。」（PI p.311）

そしてこの『シュルレアリスム宣言』の最後には、次のように書かれているのだ。「私が考えているようなシュルレアリスムは、現実世界の訴訟において、弁護側の証人として、シュルレアリスムを告訴することが問題になり得ないので我々の絶対的非順応主義（下線原文）を結構はっきりと言っておこう。」（PI p.346）

ここにおいて明らかになってくるのは、ブルトンにとって現実は自らの生活を好ましくない形にしているいわば敵のようなものとして否定され、かつそれと戦わなければならないものであるということだ。ブルトンの著作の中から別の表現を探し求めてみるなら、『失われた足跡』に収録されている 1920 年の『NRF』誌に発表された「ダダのために」の中に次のような記述がある。「私はたった一人の人間も、その人生において少なくとも一度も、外部の世界を否定したい気持ちを持ったことがなかったというのは疑わしいと思う。」（PI p.236）

つまりこの現実否定の考えは何もブルトン独自のものではなく、全ての人と言わないまでも少なくない人たちにとって共有されるべきものであるという判断がブルトンにはあったのであり、それだからこそシュルレアリスムが成立する根拠ともなり得るのである。しかし一方で、現実というものの重みないしは価値について考慮しておく必要がある。つまり否定してそれで全て解決というわけではないのだ。例えば何かの企画を考え実行に移そうとした時、それが正しいかどうか意味があるかどうかとは別に、全てを否定してしまう言葉として「それは現実的ではない」というものがある。つまり現実的でなければいけないという大前提があり、それがあたかも価値として機能しているということである。別の言い方をするなら、いくらいいことを考えてもそれは机上の空論というわけだ。このあたりについてのブルトンの考えはこうだ。「現実主義的な取組み方についての訴訟は物質主義的な取組み方についての訴訟の後、調べられることを必要とする。（中略）それに対して、聖トマスからアナトール・フランスに至るまで、実証主義に着想を得た、現実主義的な取組み方は、あらゆる知的かつ精神的な飛翔に対する敵意がかなりあるように私には見える。私はそれが大嫌いであって、というのもそれは凡庸さと、憎悪とそして卑屈な尊大さで構成されているからだ。」（PI p.313）

従って現実主義的であることは否定されるべきだが、現実そのものを完全に否定してしまうことはできない。ブルトン自身シュルレアリスムの現実否定の方針を明らかにした上で、次のように続けて書いているのだ。「シュルレアリスムは、逆に、我々がこの世で到達することをはっきりと希望している放心の完全な状態しか正当化できないだろう。」（PI p.346）

つまり現実にいながら現実を否定するということになる。別の観点から捉えてみるなら、ブルトンは愛を通して幸福を獲得しようとしていたのであるが、それは何も空想上のことではなく、現実において実際のこととしてなのである。フェルディナン・アルキエも『シュルレアリ

スムの哲学』において、次のように指摘している。「しかしながら、ブルトンが幸福を見出す、それも愛によってそれを見出したいと思うのは、この世界から、そしてそれのみにおいてである。」（PS p.19）

確かに現実を否定しておきながら現実から何か価値あるものを得ようとするのであるから、いささか矛盾しているようにも思われる。これを矛盾なしに捉えるためには、現実をどう捉えていくかについて我々は検討を加えていかなければならない。そもそもブルトンは『シュルレアリスムと絵画』において再度超現実に言及しているのであるが、ここでは夢と現実を弁証法的に合一させるという方法ではなく、現実を通して超現実に至るという考えを示しているのである。「私が愛する全てのもの、私が考え感じる全てのものは、超現実は現実そのものの中に含まれるであろうし、そしてそれに対して上部にも外部にもないだろうという内在性の独特な哲学に私の心を傾かせる。また逆も正しいのであって、というのも容器はまた中身でもあるだろうからだ。それはほとんど容器と中身の間の通底器ということだろう。」（PIV p.404）

こうなると現実を全面的に否定していては超現実に到達することもできないということがわかるし、また現実そのものを変えるという手続きを踏む必要性について言及されていないことから考えると、全ては内心の問題として処理されるべきであるのかという考えも出てくることから、観念論についても考察しておく必要も出てくるだろう。以下我々は現実を把握することにおける問題点から始めて考察していくのであるが、まず指摘しておかなければならないのは、ブルトンのテキストにおいて現実とは réalité であり超現実は surréalité であり、また『シュルレアリスム宣言』において「現実の生活」とは la vie <u>réelle</u>（下線原文）であり、また「現実世界」とは monde réel となっているということである。réel（réelle は女性形）は réalité の形容詞なのであるが、名詞としても用いられ、ラカンの言う現実界は réalité ではなく réel である。辞書的にはこれも現実と捉えることは可能であるが、現実的なもの、現実界と訳すことになるだろう。ブルトンは現実を réalité と réel の二つを使い分けているということはないのであるが、後にも触れることになるラカンの現実界が réel であることから、その違いについては意識的である必要があるだろう。ラカンはシュルレアリストたちとは懇意であったとはいえ、ブルトンがラカンの理論に基づいていたということはなく、この違いについて言及するのは我々の論理展開上の必要性からである。我々が現実を目の前にして、それも自分たちにとって好ましいとは言えない現実を目の前にした時、本来あるべき現実を考えてみるというのは意識の流れとしてはあり得ることである。しかし果たしてその結果あるべき現実に到達するかというと必ずしもそのような事態には至らない。つまりそこにあるのは我々の欲望を反映した現実界であり、多分に否定されるべき現実と重なり合う部分が多い。ここにおいて生まれてくる戦略とは欲望を満たすような現実界に向かうことではなく、むしろ欲望から解放されるよう現実界から逃避することである。従って我々がまず向かうべきは、嫌悪すべき現実の方なのである。現実は何故これが現実だと我々に思わせようとしているのか。このような偽装こそ現実にある最も本来的な現象である。このような偽装が生じるのは、何かがあってそれを隠すために偽装しているのだという形をとるのではなく、これこそが本当であるという風に騙る時である。このような偽装が可能になるのは、現実がそもそも偽装を生み出す構造になっているからである。従って我々は

現実を成立させている問題点について、我々を錯覚させる現実の構造を指摘することで考えていく必要があるだろう。

第一部　現実把握上の問題点

第一章　対他存在の問題点

仮に無実の罪で有罪となり刑務所暮らしをしている人にとって、現実とは刑務所内での生活を意味するのであるが、本来的に考えてみるならば、外での生活こそ本来あるべき現実である。またモジリアニのように生前認められなかった画家について、その真価が認められた死後において天才画家と称することは可能であるが、本来的に天才である画家について、つまりその才能を認められていない段階において天才画家と称することはできない。つまり現実とは実在するものとその本質との差異が歴然とある世界なのである。従って本当はどうであるかを問わずに、現実の動きに従っておいた方が生きやすいとした点でサルトルは正しかったのである。サルトルはこの問題をジャン・ジュネの生き方に関連させて論じている。つまりジュネは泥棒として疑われ、そのように認識されたことによって泥棒として生きることを決意するのである。サルトルの分析は次のようなものである。「確かに、彼はずっと以前から対象であった。まともな人々が彼を泥棒と呼んで以来である。しかし内在的な対象であり、魂の背後の対象なのである。彼は彼の意識と彼の客観的存在とを一致させることができず、この自我をして彼の活動の目的とするために、要するに他の人たちがそうしていたように彼自身の眼に自らを作り直すために無駄な努力をして疲れ果ててしまっていたのだ。」（SG p.607）

この段階ではジュネの主体性は確立されていず、いわばお仕着せの姿だったのである。ところがサルトルの言う対他存在を自分があるべき姿の目標として設定することで、ジュネは主体性を手に入れることになるのだ。その条りが次のようなものである。「今では彼は自らの誤りを理解している。彼は自分がそうなりたいと思っているように他の人たちに彼を見させなければならなかった時に他の人たちが彼を見ていたような自分になろうと望んでいたのだった。彼は他の人たちの魂を両手でしっかりと摑み、この白い生地をこねて彼が望んでいる姿にすることだろう。人がそうであるものになり得たりならなければならない環境とは、他の人たちの意識なのである。自らを対他（下線原文）存在として存在させることで、ジュネは即自の中に（下線原文）自らを形成するのである。」（SG p.607）

ここには厳密に考えてみるならば論理のすり替えのようなものがあって、ジュネは他人によって作り上げられた正しく言えば捏造された自分の姿について、それを押し付けられたものではなく自分で選んだものだと主張しているからである。別の言い方をするなら、自分に何らかの欲望があったとして、それを受け入れてもらうもしくは受け入れさせるために他人の意識の中に入り込むことは容易ではないと考えられるからである。この問題を論じるためにサルトルが『存在と無』において対他存在を説明している例を持ち出してこよう。「嫉妬から、興味から、悪趣味から、私がたまたま扉に耳を押し当てるとか、鍵穴から覗くとかしたと想像してみよう。」（EN p.317）

ここにおいてサルトルは鍵穴から中を覗いている人物の意識を意図せずに設定してしまって

いる。あまり上品とは言えない行為をしている人物自身がその行為について自覚的であるということだ。つまりある意味常識ある人物として設定されているのだ。だからあまり上品とは言えない行為について、それなりのためらいを持っているということが前提となっているのだ。ただ一方でもし誰も見ていなければ、その行為を自分の中で正当化することも可能なのだ。いささか強引ではあったとしても、自分自身を納得させる理屈は準備してあるのだ。ところが鍵穴を覗いている時に、不意に廊下に誰かが現われる。サルトルは次のように書いている。「ところが、このようなことが起こるつまり私は廊下で足音が聞こえたのだ。人が私を見る。これは何を意味するのか。それは私が突然私の存在において打撃を受けるということそして本質的な修正が私の構成において出現するということである。」（EN p.318）

ここにおいて他人の意識の中に入り込みどのように考えているかを確かめることなく、自分は恥ずかしいことをしているという意識にとらわれるのである。実際サルトルは「私に他者の視線をそしてその視線の先に私自身を明らかにし、私に見られたという状況を認識（下線原文）させるのではなく、生き（下線原文）させるのは羞恥心か自尊心である。」（EN p.319）と書いている。自分自身いささか恥ずかしいことをしているという意識はあったとしても、そばに誰もいなければそれをなかったことにもできるのだ。ところがそばに他人が現われることによって、まさにその恥ずかしさが顕わになるのである。仮に鍵穴を覗くことにいくばくかの正当性があったとしても、あたかもなかったかのように消滅してしまう。この時の「私」はどのように扱われるべきなのか。サルトルはこのあたりの関係を次のように記述している。「ここにおいて、逆に、流出は果てしがなく、外部において消えてなくなり、世界は世界の外で流れ私は私の外で流れていく。他者の視線はこの世界において、この世界（下線原文）であると同時にこの世界の向こうにもある世界の真ん中で、私を私の存在の向こうに存在せしめるのだ。私であるとともに羞恥心が私にさらけ出しているこの存在でもって、私はいかなる種類の関係を維持できるのか。」（EN p.319）

ここにおいて疑問として出てくるのが、他者があたかも全てを知っているかのように機能しながら、仮に鍵穴を覗いている人物に何らかの正当性があったとしても知る由もないし、知らないことについては免責されているという点である。むしろ鍵穴を覗くことに全面的な正当性があったとしても、他者はそのことに関知しない立場を保有することができていると言うべきである。サルトルが指摘しているように「ずっと以前から他人が私が誰であるか教えてくれると言われてきた。」（EN p.333）わけで、他人にはそれなりの価値判断の優位性が認められているのだ。また一方でサルトルが「そして他者の存在についての我々の十分な確信はこの事実をもってして純粋に憶測にすぎない性格を取り戻すのではないか。」（EN p.335）と指摘するように、鍵穴を覗いている時に廊下に現われた人物は鍵穴を覗いているという行為自体を見ていなかったのかもしれないし、ただ単に足音がしただけで鍵穴を覗くという行為を見た人物がいなかったという風にも言えるわけだ。従って存在していない人物のまなざしを感じて羞恥が生じるという結果になっているのかもしれないわけで、他者の優位性とは関係のないところで全ては進行しているかもしれないのだ。それにそもそも鍵穴を覗く行為にそれなりのためらいを感じているという内心の問題が前提となっているわけで、それすら感じないということであれば

他人の存在に関わらず羞恥が生じることはあり得ないのだ。『ナジャ』においてナジャが精神錯乱を起こしその結果精神病院に入れられてしまったという事態に対して、ブルトンの周辺ではブルトンを批判する様々な声が上がっていたようだ。『通底器』の中では、ブルトンが自らの夢の分析をしていてその中でナジャと思われる老婆が出てくるという夢があり、その分析の際ブルトンは多少の責任を感じているという記述をしている。「彼女に関する私の本を読んでそのことに腹を立てたかもしれない、正気であろうとなかろうと、ナジャの帰宅の可能性に対する弁護（下線原文）、彼女の精神錯乱への周到な準備と従って彼女の収容において私が持ち得た意図しない責任、かんしゃくを起こした時には、今度は彼女を狂気にさせたがっていると私を非難しながら、Xがしばしば私に面と向かって言った責任に対する弁護（下線原文）」（PII p.122）。

従ってブルトンはナジャの入院の件についてあったかもしれないという責任については自覚的であったのだが、『ナジャ』のテキストにおいて「最も経験豊かな人たちは、私がナジャについて報告したことの中から、既にあった妄想に果たしていると認められる寄与を急いで探そうとするだろうしそして恐らく彼らは彼女の人生における私の介入、これらの考えの展開に実際に都合のいい介入に、ひどく決定的な価値を割り当てるだろう。」（PI p.736）と書きながらも、「低級な全ての愚か者たちに属することに対しては、言うまでもなく私は彼らをそっとしておく方を選ぶ。」（PI p.736）として、他者の意見を受け入れる姿勢を示していない。シュルレアリスムの立場からも、対他存在を尊重して環境に順応するという現実主義的な実存の仕方はあり得ないと言うべきである。

第二章　他者とは誰かという視線の問題

存在のあり方として対他存在は可能だし認められ得るものであるのだが、その場合他者とは誰なのかという問題がある。ラカンの言うように「大他者は存在しない」となれば、実際の生活における他人がそれとして考えられるが、いわゆる総意なるものが常に既に存在するわけでもないことから、具体的に誰かと指定することは無理である。日常生活においてこのような状況であるが、他者つまりは視線の主を特定することの困難についてミシェル・フーコーとジャック・ラカンを援用しながら論を進めていこう。フーコーは『言葉と物』の第一部第一章において「侍女たち」と題し、ベラスケスの同名の絵について分析を加えている。この絵を見ているのは誰かということになると我々鑑賞者ということになるのであるが、それでは絵を成立させている視線は誰に帰属するのか。絵を描いているのはベラスケス本人なのであるが、この画家は絵の中で絵筆を握りながら制作中の絵に視線を投げかけ何かを考えている風なのだ。一見しただけではわかりにくいが、しばらく眺めていると絵の中央あたりに鏡があり、そこには今描かれつつある絵のモデルたちが映っているのである。その二人とはスペイン国王フェリペ四世と王妃のマリアーナであって、この二人こそが絵を成立させている視線の持ち主だということがわかる。そしてそれはただ単に絵の問題だけに留まらず、権力のあり様を示しているとフーコーは考えるのである。「絵の端、鏡がちらつかせている二つの小さな影絵の中に、彼らは認められる。注意深いこれらの全ての顔、着飾ったこれらの全ての体の中で、彼らは全ての映像の中で最も精彩がなく、最も非現実的で、最も危いものである。動き、少しの光は彼らを消滅

させるに十分だろう。表現されているこれらの全ての人物の中で、彼らはまた最も顧みられないのである、というのも全世界の背後に紛れ込み思いもかけない空間によって密かに忍び込んでいるこの姿に誰も注意を払わないからである。彼らが目に見えるという点において、彼らは全ての現実の中で最も弱々しく最も遠い人影なのである。その代わり、絵の外部に存在しながら、彼らが本質的に目に見えないところに引っ込められているという点において、彼らは彼らの周囲で表現されたもの全てを仕切っている。」（MC p.29）

この絵の中心が国王と王妃であるとして、その視線の先にはマルガリータ姫がいて、二人の愛が十分に注がれていることを見て取ることができる。また国王は当然至上の君主なのであるが、実際の政治において裏に回り策を練っているのが「右側にいる来訪者、部屋の中に入ろうとして階段に片足をかけている。彼は背面から全ての現場をとらえているが、光景そのものである国王夫妻を正面から見ている。」（MC p.30）ということかもしれないのだ。更に言うなら、この絵が「侍女たち」と題されていることから、権力関係は国王が至上の存在という制度上のものではなく、あちこちに中心があって流動的であるとするドゥルーズ＝ガタリの主張を受け入れることも可能だろう。何も革命が起こり、その首謀者たちが侍女であるという可能性はない。ただ表面的なものだけが現実なのではないということだ。そして視線のことを問題するならば、フーコーも指摘しているように、例外的存在は「右側にいる寝そべった犬」（MC p.29）である。「右側にいる寝そべった犬は、見ることも動くこともしない絵の中の唯一の要素であり、それはその大きな立体感と柔らかで光沢のある毛の中で戯れている光とともに、見られる対象であるためにのみ作られているからである。」（MC p.29）

このように考えてみるならば、この絵の中心は絵の中では不可視の存在で外部に位置しながら視線を向けている国王夫妻であると言い切ることは困難であるかもしれない。そんなことはあり得ないと考えながらも、ひょっとしてという可能性が犬以外の全ての人物に認められるのだ。つまり絵一枚だけでも視線の主を決定することは容易ではない。ところがもう一方で、ラカンが『精神分析の四基本概念』の中で視線を問題にしている時に取り上げているハンス・ホルバインの『使節たち』という絵を考えてみよう。この絵の中には使節たちという二人の高位の人物が描かれ、同時に二人の間には当時の諸科学や諸技法を象徴するものが並べられている。これらを見ただけではこの絵を見ていないということになるかもしれない。というのもよく見れば、この人物たちの下に斜めに描かれる形で髑髏が存在するのだ。これは現実に栄華をおさめていても結局のところは無に帰するのだという意味であるとされている。この絵において二人の人物はこの髑髏を見ることができない。その意味で絵の二人はあくまで対象の位置に留まるのである。従って視線の主体を形成するのは我々鑑賞者だということになる。ただ髑髏の存在に気付くかどうかで立場は分かれ、見ているが実は見ていなかったということは起こり得ることである。この場合他者の指摘によって気付かされ見えるようになるということはある。ここにおいて視線の共有ということが起きる。確かに髑髏を見るというのはいささか衝撃的ではあるのだが、指摘されれば認識することは容易である。何故ならそれは既にそこにあったからである。あることに気付かなかったけれども、他人の指摘によってあるものがあるということにいわば同語反復的に成立するのである。本来なら気付いていてもおかしくはなかったのだが、

まさかそういうものがあるとは知らなかったということで、ここにあるのは価値観の変革や能力の上達といった問題ではない。というのも他人の指摘によって髑髏の存在に気付かされた我々が、更に未だ気付いていない他の人たちにそれを指摘することが可能だということである。このちょっとしたことを知っているという多少の優越感は別にして、ここで注目しなければならないのは髑髏の存在を指摘すれば多少驚くとともに、その事実を受け入れるだろうという事態をさほど考えることなく予期できるからである。今手元にある本来的には紙切れにすぎない紙幣がこの現実において有効に機能するのは、何らかの商品の購入の際にその紙幣を差し出せば、差し出された方は何のためらいもなしに場合によっては喜んでそれを受け取るであろうということを予期できるからである。世の中の全てを信じることができないとする強盗が、その紙幣の交換可能性を信じているということである。ところが我々が現実を見る時、現実は様々な形となって現われる。ある物に対して人によって高いとか安いとかの認識の違いも出てくる。従って現実とは一様ではないのだ。『ナジャ』を例にとるなら、ナジャの物語の始まる前に、ブルトン自身が体験したシュルレアリスム的とも言うべき話が紹介されているが、その中でルイ・アラゴンによって指摘されたあるホテルの看板の話がある。その看板はそれ自体としていわば客観的な対象物として存在しているはずであるが、ある角度から見ると本来書かれているものとは違った文字が見えてくるという。また「我々が手袋をした婦人（下線原文）と呼ぶことになるだろう婦人」（PI p.681）によって連れて行かれた一枚の変わり絵の話がある。「それは古い彫版で、正面から見ると虎を表わしているが、表面にはそれ自体が別の主題を断片に分けている垂直の小さな帯で垂直に仕切られているので、わずかでも数歩左に離れると花瓶を、数歩右に行くと天使を表わしているのである。」（PI p.681）

これなどラカンによって指摘されているハンス・ホルバインの『使節たち』の絵と同様で、それが何であるかについては他者と認識を共有できるのである。ところがブルトンにとってナジャの現われたパリという街は、他者にとっても共有できる存在ではあるのだが、全く同じように捉えられるということはそもそもあり得ない話であるし、ブルトン自身にとってもパリという街は一様ではないのである。ブルトンはナジャの物語の後、その物語が進行した場所を再度見直すことを試みるのであるが、「この機会に、私はいくつかの例外を除いてそれらが多かれ少なかれ私の企てに対して身を守っていて、その結果『ナジャ』の写真入りの部分は、私に言わせれば、不十分だったと気付いたのである。」（PI p.746）

確かにナポレオン三世時の大改造を持ち出すまでもなく、パリという街は時間とともに少しずつではあるが変化しているというのは客観的な事実だろう。そして当然ここには様々な人たちが関与するわけであるし、更には様々な現象も見て取れるということになる。その上で誰が見るかという問題が関わってくるのであるが、仮にそれを『ナジャ』にとってのブルトンと限定して考えても、パリという街は移り変わるのだ。その際ブルトンの主観の問題が大きく作用していることを見なければならない。

第三章　現実を正しく見る視線は存在するのかという問題

ブルトンはナジャの物語を書き終えた時点で、それを完成として見なさずそれに更に何かを

付け加える形で『ナジャ』のテキストを完成させようとしていたのであるが、それについては一つの理由として当時ブルトンにとっての愛人で『ナジャ』においては「君」として表現され『通底器』においてはXと表記されているシュザンヌ・ミュザールとの関係があるのではないかと思われる。つまりシュザンヌとの関係が良好な時点で、いわば精神的に余裕のある状態で『ナジャ』を完成させ作品として公表したかったと思われるのだ。ところがその関係はあまり良好とは言えず、シュザンヌは元の愛人であったエマニュエル・ベルルのもとに戻ったとされている。このような失意の状態で、ブルトンは『ナジャ』というテキストの扱いに苦慮していたものと思われる。作品としては出す、ただナジャの物語をどのような位置付けにするかという問題があるのだ。このような心理的状態を、ブルトンは『ナジャ』において注の形で一つのエピソードとして紹介している。ブルトンはマルセイユの旧港の桟橋のところで、ある画家が夕陽を描いているところに遭遇する。この画家は恐らく几帳面というか、目の前で展開されている事実を正確に描きたいという気持ちにとらわれていたのだ。ところが夕陽は時間とともに傾いていくわけであって、写真のようにその瞬間をとらえるということはできないから、時間的なずれが生じてくるのである。そのため結局のところこの画家は夕陽を描くという当初の目的を果たすことはできず、夕陽の沈んでしまった暗い空が画布の上に現われるという結果になったのである。この結末にブルトンはひどく同情的になるのだが、視覚的な面だけでもこれが現実であると提示することの困難が窺い知れるのである。現実を正しく捉えることの困難を物語る別の話として、我々は映画の「猿の惑星」シリーズの中で出てきたタイムマシンの原理を説明した場面を想起しよう。タイムマシンの原理として正しいのかどうか判断することはできないが、説明としては興味深いものがある。この話も画家に関することなのだが、この画家は野原に出かけて行き、そこにあるものを全て描こうとする。絵がとりあえず完成したかに見えたのだが、この画家は何かが欠けているような気がする。それは存在するもの全てを描こうとしているのに、肝心の自分自身が描かれていないことに気付いたのだ。ところがその自分自身を描き込んで完成かというとそうではない。自分自身を描いている自分自身が描かれていないのだ。このようにして無限に自分自身を描かなければならなくなってしまうということだ。このような問題はサルトルも『存在と無』で扱っていて、サルトルは否定的な立場だ。サルトルの考えを見てみると、「ある見晴台から（下線原文）全景を眺めている一人の散歩者は、全景とともに見晴台も見ている。彼は見晴台の円柱の間の木々を見ているし、見晴台の屋根は彼から空を隠す、等々。しかしながら、彼と見晴台との間の « 距離 » は、定義上、彼の眼と全景の間よりは大きくない。そして観点（下線原文）は、例えば、人がいわば補助的な感覚器になる眼鏡、鼻眼鏡、片眼鏡などの場合において見るように、それとほとんど融合するまで、身体に近付くことがある。極端な場合――そしてもし我々が絶対的な観点を思い描くなら――観点とそれが観点であるところの人物との距離は消滅してしまう。このことは « 距離を置く » ために後退することそして観点の上に新しい観点を設定することは不可能となるだろうということを意味する。」（EN p.394）

従って自分自身がその場にいながら現実を正しく捉えるということは無理なのである。あたかも客観的に捉えたように思えたとしても、その時自分自身はカッコ付きの存在もしくは外部

に位置していることになるのである。ところが実際は自分自身もその場にいて現実を構成しているにも拘らずだ。これは人混みの中にいて自分自身もその混雑の原因を作っているにも拘らず、混雑の原因を全て他の人たちの存在に求めることに似ている。そのため自分自身も含めて現実を正しく捉えようとする時、あるいは正しく捉えていると思っている時、誰がそれを見ているのかという問題である。映画的に言えば、主人公が登場人物であるとともに語り手でもあって、その場の状況をカメラの眼とともに語るのである。場合によっては登場人物が見ていないあるいは見ることができない状況をもカメラは映し出すことがあり、また語り手は主人公以外の行動や心情更には知るはずもないこと特に将来のことについても知り尽くしている立場でその場の状況を解説するのである。小説の領域で言えば、フランソワ・モーリャックも言うように、作者は神の次元にいることになる。映画や小説でそのような設定が可能だとしても、現実において自分自身をも対象として捉えながら現実を把握することは不可能であり、そのような意識があるとすれば錯覚である。しかしそれが錯覚であるにも拘らず、そのような認識の書き換えを何故するのか。恐らくそれは生きやすいからであり、逆に言うなら生きていくためにはそのような虚構を必要とするのだと言えるだろう。例えば『ナジャ』においてブルトンがナジャとの出会いを日記形式で毎日書き綴っていくのであるが、その記述が中断された 10 月 12 日（正確には 10 月 13 日も含むと思われるが）以降「ここにおいてこの死に物狂いの追求が終わるということがあり得るのか。」（PI p.714）と書いた上でナジャとのことを反省的に捉えていくのだが、『ナジャ』の冒頭において「私は誰か。」（PI p.647）とブルトンが問い、初めて出会った 10 月 4 日の段階でブルトンがナジャに対して「あなたは誰か。」（PI p.688）という問いを投げかけていて、最終的に自分たちは誰なのかという問いを投げかけることになる。ここにおいて注目すべきは、ブルトンとナジャを見ているのは誰かということなのである。「現実、私は今や知っているが、狡猾な犬のように、ナジャの足もとで横になっていたこの現実の前で我々は誰だったのか。このように象徴に熱狂的に身を任せ、我々が自分たちに見ていた最終の働きかけ、奇妙で特別な配慮の対象である、類推の悪魔に襲われて、我々はいかなる自由の下にしっかりと存在し得ていたのか。共に投げ出され、これを最後に、地上からかくも遠くに、我々の驚異的な茫然自失が我々に残していた短い間隔の中で、我々が古くからの考えや果てしない人生のくすぶった残骸を越えて信じられない程一致したいくつかのまなざしを交換できたのは何故なのか。」（PI p.714）

ラカンの鏡像段階理論をもってすれば、ブルトンが「私は誰か」と問う時、ナジャを通してその答えを得ればいいわけであるし、仮にナジャが同様の問いを自らに投げかけるなら、ブルトンを通せばいいということになる。ところがブルトンとナジャの二人が我々とは誰かを問いそして恐らくそれはブルトンからのみ発せられた問いであるとするなら、ブルトンはナジャを見ているだけでは答えは得られないということになる。確かにブルトンとナジャはお互いをどのように捉えていたかを明らかにするのであるから、ある程度の認識は可能になるだろう。ところがここで問題になっているのは、ブルトンとナジャの二人であって、この二人を見るためにはこの二人以外の他者の視線が必要になってくる。ここにおいて神の視線を持ち出してくることはできないだろう。何故ならブルトンはナジャの物語を終えた後に再度この物語の展開さ

れた場所を見直すことを試みるわけで、ここでつまりナジャの物語全体を見ているのはブルトン一人であることは明らかだからだ。確かにブルトンは同時進行的にブルトンとナジャの二人を見ているわけではなく、時間が終わった上で過ぎ去った時間（それが長いか短いかは問題ではない）を思い出す時点で二人を見ているのであるが、この時ブルトンはブルトン自身をも見ていることになる。これはブルトン自身の記憶としては厳密に言えば正確ではない。何もブルトンが嘘をついているとか勘違いをしているとかいうのではない。恐らくブルトンは正確な記憶の再現を試みているはずである（何故なら文字通り生存に関わる問題だからである）。つまり何が生じているかと言えば、ブルトンにとっての記憶の改変ということである。見ているはずのないものを（何故なら自分の手や足を自分で見ることはできても自分自身全体とか自分の背後を見ることはできないからである）見たと記憶を操作していて、恐らくそれは無意識的なものだろうが何のためにそのようなことになるのかを考えなければならない。

第四章　現実とは事実ではないかもしれない

フーコーが『監視することと処罰すること』において紹介しているベンサムの一望監視施設は様々なところで言及されているので、ここで再度説明する必要はないと思われるが、ここにおいて重要なのは囚人にとって現実とはいかなるものであるかということである。確かに客観的には牢獄の建物としての状態や監視人の配置等を記述することはできるだろう。ただ囚人たちにとってはそのようなものは窺い知れないわけであるし、わからないように設定されているのがこの牢獄の特色なのである。囚人について言うなら、「各人は、所定の場所にいて、そこからは見張りによって正面から見られる独房にしっかりと閉じ込められる。しかし側面の壁は彼が仲間と連絡を取ることを妨げる。彼は見られるが、見ることはないのだ。情報の対象であり、決して意思伝達において主体ではない。」（SP p.202）

ここからどういう効果が生まれるか。「権力の自動的な作用を保証する可視性の自覚的で恒久的な状態を拘留された人に生じさせること。それは以下のことを引き起こす。監視がたとえその行為において断続的であっても、その効果において恒久的であるようにすること。権力の完成はその行使の現状を無駄なものにする傾向があること。この建築的装置はそれを行使する人物から独立した権力関係を作り維持する機械であること。要するに拘留された人は彼ら自身が権力を担っている権力状況にとらわれていること。このためには、囚人が絶えず見張りに監視されているのは十分すぎると同時にほとんど足りないということである。ほとんど足りないというのは、肝心なことは囚人が自分は監視されていると知っていることであり、十分すぎるのは、実際に監視されている必要はないからである。」（SP pp.202-203）

ここにおいて囚人が（この囚人とされる人が果たしてそれに値する程の罪を犯したかどうかについてはここでは問わないことにしよう）、牢獄に入れられているということは事実である。これは否定することができない。ところが監視人が本当にいるかどうかは定かではない。いるかもしれないしいないかもしれない。権力の側からすると、いてもいなくてもよくて、いなくても全く構わないということである。肝心なのは囚人の心の中に常に自分は見張られているという意識を植え込むことであって、そう思わせておけば実際に監視人がいなくても問題はない。

既に効果は出ているということだ。我々が問題にしたいのは一望監視施設の効果ではなくて、囚人にとっての現実とは実際の現実とは異なるということなのである。異なっていても構わないというか異なるように設定されているわけで、それは強制されているというよりも囚人の方が自発的にそのように考えているということなのだ。もちろんそもそもの始まりから考えていけば、そのように囚人に思わせるようにしたのは権力の側であって、囚人が積極的にそのように考えたいと思ったわけではない。囚人にしてみれば脱獄を試みて更なる処罰があってもいけないし、その脱獄自体も失敗してしまっては何の意味もない。だからこそ自分が監視されているのではないかという事態に自覚的であったのであり、図らずも自分で自分を縛ってしまったような事態に至っているということである。

次にカフカの『審判』の中で語られる「掟の門」を取り上げよう。これはある男が呼ばれたために出かけて行った先で、その中に入ろうとするとそこには門番がいて、この門から中には入れないと進入を禁止し続けるという話である。門番は時には少し待っていれば中に入れるかもしれないという可能性をほのめかすし、そもそも入りたくて来たわけではなく呼ばれて来ているのだから、自分の判断で帰ることもできないという状況である。そして結局のところ男は門の中に入れず、門の前で死んでしまうのであるが、死の間際に門番が男にこの門はお前のためにだけあったのだと告げ、男が死んだ後は何事もなかったかのようにその場を立ち去っていくのである。この「掟の門」については様々な考察がなされていて、その考察自体読み解くのが難題であったが、カフカが生前自分の父親に宛てた手紙があり、それは実際には父親のもとには届けられなかったのだが、我々はカフカの全集の中に収録されているために読むことができるのである。この手紙を読めば「掟の門」解題は容易であると思われるが、ここにおいて客観的な事実として存在するのは、男と門番の二人と掟の門というまさに現実に立てられているものである。これについては男の側からも門番の側からも異論がないであろうが、問題なのは男にとっての門に関わる現実と門番から見た現実が全く違うものになっているということである。門番は男の死の間際にこの門はお前のためだけに存在したのだということを言うわけであるから、真相を知っていたとも思われるが、知っているのはまさに口にしたことだけで、真相は全く知らなかったということはあり得る。それに反してというかもう一方の死んだ男について言うなら、真相は全く知らなかったと断言できる。というのももし真相を知っていたならばたちどころにその門の前から立ち去るはずだからである。門の前に留まり続けたということは真相を知らなかったということなのだ。そして真相を知らずとも、男にとって現実というものは存在する。その現実とはただ単に門番がいる、門が立っているというだけの話ではないのだ。呼ばれたにも拘らず、門があって、その中に入ることができないのは何故か。入るためにどうすればいいのかという思いが、男の現実の大部分を構成しているのだ。また客観的事実として捉えられる門や門番にしても真相の側から言えば、それが果たして門であったのか、門番であったのか大いに疑問が残るところだ。肝心なのは男にとってそれが門であり門番でありさえすればよく、実質的にはつまり他の人たちから見てということだが、門でも門番でもなかった可能性は極めて高いと言わなければならない。つまり現実とはこのようなものであって、客観的事実がまずあって、それに対して各自の思いや解釈が加わって成立するというのでもないのだ。

前提となるべき客観的事実がどこまで客観的で事実と言えるのかも疑ってかからなければならない。このような観点から『ナジャ』の序言を読み解いていくことは必要なことである。ブルトンは『ナジャ』を書くにあたって、シュルレアリスムの立場からいわゆる反文学的な目標を掲げていて、主観的になることを極力排除することから、写真図版を数多く添付したということがあり、また記述の仕方についても文学的にならないよう「医学的、とりわけ神経精神医学的観察記録」（PI p.645）を下敷きにしているということである。「《ありのままにとらえられた》記録を全く歪曲しないように気を配る、この断固とした態度」（PI p.646）は逆に、ブルトン自身の思考があるということを示している。それはブルトンがナジャの物語の後にその物語が展開された場所を見直すにあたって、パリという街が微妙に変化していることを指摘する条りに現われる。「《ある街の形》、私の思考にとっては生命にとっての空気のようなものと思われているであろう要素の力で私が住んでいる街から取り出され抽象化された真の街についてまさに、どうなっているかについて思い巡らすことになるのは私ではない。」（PI p.749）

ブルトンの意図からすれば、あったことだけを記述するという方針があって、それ以上は書かないということであるが、それはそこに含まれない形でとブルトンは主張するわけであるが、ブルトンの思考があることが明らかになるのだ。そしてブルトンはこの街の外形に変化が起こっているとした記述の後で、無意識に依拠することを宣言するのだ。日常生活において無意識のうちに行動するということはあり、またこの無意識の端的な表現が夢であると考えるなら、超現実の定義においてその前段階に存在するとされた対立する二項である夢と現実は何ら対立するものではなく、夢はその人にとっての現実の一部であると考えることができる。夢の成立には現実において体験した要素がいささか奇妙で変形された形ではあるが現われるということがあり、また見た夢によって現実の生活が左右されるということもある。ラカンの言うように、悪夢から目覚めるのはあまりの恐ろしさのために夢の世界から現実の世界へ逃避したということなら、夢と現実とは全く別個のものではなく、その人の中にあっては繋がっているということなのである。つまり現実というと外的世界の客観的に捉えられる対象という認識があるが、実際のところは現実を捉える側の内的な部分もその構成要素であり、場合によってはその本人も気付いていない無意識の領域も含まれることになるのである。

第五章　客観的な現実は存在するのか

例えばソシュールの関係主義的な考えに従うなら、甲の右に乙を置いたとして、甲の性質として左というものが出てくる。ところがその乙を甲の左側に持ってくるならば、甲自体は何ら変わっていないのであるが、甲の性質として右というものが出てくる。先程は左と言っていたにも拘らずである。次に乙を甲の上に持ってくるならば、甲は下という性質を帯びることになり、更に乙を甲の下に持ってくるならば甲は上として捉えられることになる。甲については全く移動させていない。このように甲そのものには実体はなく、全て他との関係によって規定されるということになる。これは何も上下左右といった位置関係に留まらないのであって、他の性質を持ってくることも可能である。またレヴィ＝ストロースが構造主義の考えを打ち立てるにあたって参考にしたヤコブソンの音韻論の考えを持ち出してくるなら、いくつかの関係主義

的な性質を参照基準とすれば全てのものは捉えられることになる。果たしてこれで全ては客観的に捉えられることになるのか。プルーストの『失われた時を求めて』の中には無条件の幸福感を得られることになったいくつかの体験が記され、それが小説が書かれる上での重要な主題や動機になるとともに、それこそがプルーストを小説家たらしめることになったのであるが、その幸福感をもたらすいくつかの体験の中には有名なマドレーヌ菓子を紅茶に浸して口にした時のことだけではなく、マルタンヴィルの鐘楼に関するものがある。「それだけが、平野の高さからそびえ立ちながら短く刈り込んだ平原に紛れたかのように、マルタンヴィルの二つの鐘楼が空に向かって上昇していた。やがて我々はそれが三本になるのを見た。大胆な急旋回でそれらの正面にやって来て、遅れた鐘楼、ヴィユヴィックのそれが二本の鐘楼に加わっていたのである。数分が過ぎ、我々は急いで進んでいたが三本の鐘楼が平野に止まり動かず日なたではっきりとわかる三羽の鳥のように、常に遠く我々の前にあった。次にヴィユヴィックの鐘楼が遠ざかり、距離を取って、そしてマルタンヴィルの鐘楼だけが残り、まさにこの距離で、斜面の上で、私が戯れ微笑んでいるのを見ていた夕日の光によって照らされていた。（中略）我々は道を進み続けた。我々は少し前から既にマルタンヴィルを去っていたのだし、我々が遠ざかるのを見るために水平線のところに残っていたたった数秒間我々に同行した後村は消え失せ、村の鐘楼とヴィユヴィックのそれは更に別れの合図として光に満ちた頂きを揺り動かしていた。時としてその一つが他の二つが更に一瞬でも我々を見ることができるように消えていた。しかし道は方向を変え、それらは三本の金の軸のように光の中で回転し私の目から消え失せた。しかし、少し後で、我々は既にコンブレーの近くにいたので、太陽は今や沈み、私は最後に最早非常に遠くから野原の低い線の上にある空の上の三本の描かれた花のようでしかなかった鐘楼を見かけた。それらはまた私に暗闇が既に訪れていた静寂の中で見捨てられていた、伝説の三人の少女たちのことを考えさせていた。そして我々が大急ぎで遠ざかっていた間、鐘楼が遠慮がちにその道を探しそれらの高貴な影絵のいくつかの無器用なよろめきの後、互いに身をすり寄せ、互いに背後に滑り込み、今尚バラ色の空の上に、魅惑的で諦観した、最早黒い一つの形しかなさず、そして夜の中に消え去るのを見た。」（CS pp.179-180）

時間的な状況もあるが、見る位置によって鐘楼の数が変化してしまうのである。これなど何度も足を運んで近くを散策すれば、結局のところ鐘楼が何本であるかについては確かめることができるし、地元の人に聞けばよりはっきりするということは言えるだろう。しかしこれでもって客観性は確保されたかと言うとそうではないのであって、マルタンヴィルの鐘楼の場合はいいとして、見る位置によって対象物は違って見えるということはある。それならば様々な位置から観察し、また自分だけではなく他の多くの人たちの観察も参考にすればいいということになるだろう。これによってある程度は客観性に近付くということは言える。ここまでくれば最早科学的手段に訴えるしかないということになるかもしれないが、科学の領域においても客観性の確保ということは容易ではないのだ。例えば何かの温度を測る時に測定器具として温度計を使うことになるが、その温度計自体が対象物の温度を微妙に変化させるということがある。つまり対象物は主体によって観察される時にその主体によって影響を受けるということなのである。これは何も科学的領域を持ち出さなくても、何らかの面接をそれも外国語で受けるとい

う状況を考えてみればいい。面接の目的はあくまでその人の本来の姿を見るということであるとしても、緊張しているとか、いいように見てもらおうとして身構えるとか、更に外国語でということになると誰かの借り物の思想を身につけているということは大いにあり得るのである。財宝も地中深く埋められていれば発見されず存在しないのと同様であるし、いくら才能があってもそれとして認めなければないのと同じことになってしまう。我々の日常生活において言葉は重要な要素を占めているが、言葉に何かしらの実体があるかというとそうではなく、多少の行き違いや抜け落ちというのもあるが自分の発した言葉がおおよそのところは相手に受け取ってもらえるし、また逆も可能ということから流通しているものなのである。貨幣はその点客観的であるかのように思われるが、物の価格というのはとりあえずのものであって、もとを辿れば物の価値という極めて抽象的なものなのである。それが現実にあると信じているのは、まさに我々の共同幻想である。商品にしても同様で、我々の欲望の対象となればその商品の価格は上がるし、そうでなければ下がるということである。ただ商品において我々の欲望を満たすかどうかということ以前に、その商品が持っている本来的価値というものを無視するわけにはいかない。つまり我々の欲望をかき立てるものがその商品の中に内在されていると考えるべきだろう。ラカンが女性は存在しないと言う時、女性はあくまで男性の欲望によって生じた症候にすぎないということであるが、男性の欲望をかき立てるものが女性性であるとするなら、何かしらの前提があると考えるのが順当だろう。従って客観的現実があるかどうかを問うことにあまり意味はなく、仮にあったとしても何らかの主体の側からの関与というものが生じてくることになるのだ。ブルトンがナジャの物語の前の段階で芸術論的な記述をしているところがあり、まずキリコについて次のように書いている。「キリコは当時物体のある種の配置に驚かされて（下線原文）（最初に驚かされるのだ）しか描くことができなかったことそして新発見の全ての謎は驚かされたというこの言葉の中で彼を支えていたということを認めたのである。（中略）彼にとって独特な明白さを提示しているこれらの物体の配置以前に、これらの物体自体に批判的な注意を注ぎ、たとえ少ない数であっても、そんな風に配置されるよう求められたのが何故それらなのか探る理由が今尚あるだろう。アーティチョーク、手袋、ビスケットやボビンについての最も主観的な彼の見方について説明しない限り人はキリコについて何も言わなかったことになるだろう。」（PI pp.649-650）

これを一般化して、ブルトンはブルトン自身について次のように書くのだ。「私としては、物体のある種の配置の遭遇よりもある物体に関して精神の配置の方が精神にとっては今尚重要であると私には思われるし、この二種類の配置は感受性のあらゆる形式をそれらのみで支配しているのだ。」（PI p.650）

つまり一般的に我々が日常生活において現実と称する時の外的世界に対して、もちろんそこには自分が存在することでの何らかの関与というものが既に含まれているのであるが、自分はどのように思っているかということが重要なのである。ブルトンはユイスマンスを引き合いに出して、「申し出ている全てのものを評価し、存在するものの中で偏見とともに絶望を選ぶという非常に共通したやり方ということで（中略）私はユイスマンスとともにある」（PI p.650）としていて、ブルトンが現実世界の否定と言う時の現実を客観的に捉えようとするのではなく、

その場合のブルトンの精神のあり方そしてその中で捉えられている現実とはいかなるものであるかを明らかにする必要があるわけで、このことからも客観的現実というものは把握できるできないという以前の問題として、定義上も規定できないし存在しないことになるだろう。

第二部　現実は物語である

第六章　立ち向かう現実があって主体が形成される

ブルトンは『シュルレアリスム宣言』の冒頭部分で「人間、この決定的な夢想家は、日に日に自分の運命に不満足になり、彼が用いることを余儀なくされた物をやっとのことで一通り見ることになるのだ。」（PI p.311）と書いている。ブルトンは現実の生活に不満を持っていることを一般化して表現する。まず出発点として我々は、ブルトンが経験的に認識している現実の状況というものを理解して、ここから何とかして脱却することを試みているのだと理解することができる。ここにおいて現実を全くの白紙の状態として捉えることは不可能であるから、我々が日常生活において経験的に把握している利用可能な概念を用いるということになる。つまり我々は一般化を試みることで、実際の経験と比較することになるのである。ところがこのような作業を通してこの状況を理解するために利用している概念図式の中にどうも腑に落ちない点に気付くことになるのだ。つまり理論化から抜け落ちたものが現実を支配し我々の理解を越えてしまうことになるのである。例えば既に指摘した対他存在の問題で、他者は「私」の正当性に関係なく「私」を支配しようとする。確かにあまり上品とは言えない思惑から鍵穴を覗くという行為を考えてみるなら、通常そこには否定的な感情が働くわけで、突然廊下に現われた他者はそれを顕わにすることになるのである。ところが「私」にはそれなりの正当性があるかもしれないのであるが、他者はそのことについては何ら配慮しないように思われる。「私」には正当性があるのだという立場をいかにして反映させるのか。サルトルはこの点について、「私」と他者との対立が生じることを指摘している。「私に適用される全てのものは他者にとっても適用される。私が他者の支配から自由になろうと試みる間、他者は私のから自由になろうと試みる。私が他者を服従させようと努める間、他者は私を服従させようと努める。ここでは即自的対象との一方的な関係が問題になっているのでは全くなく、相互的で不安定な関係が問題なのである。以下における記述は従って対立（下線原文）という観点で考察されなければならない。対立とは対他存在の根源的意味である。」（EN p.431）

理屈としては間違っていないし、我々はサルトルの言わんとすることを理解できるのであるが、正しいかどうかあるいは好ましいかどうかは別にして、現実はそれとして現われているのであり、それなりの結着は出現することになる。その場合「私」に関して言うなら、「私」の正当性はその結着に反映されたであろうか。反映されていなくても現実は進行していくのである。ここにおいてサルトルは「私」と他者以外に第三者を出してきて考察をしている。「このことは我々を結局我々を従事させている事例へと誘導する。つまり私は他者との対立に巻き込まれているということである。第三者が不意にやって来て我々つまりある人物と他者を自分のまなざしで見渡す。私は相関的に私の疎外と対象性を感じる。私は « 私のもの » ではない世界の真ん中で対象として、他者にとって、外部にいる。しかし私が見ているか私を見ていた他者は、同

じ修正を受けるし私は私が感じているものと同時に他者のこの修正を発見する。他者は第三者の世界の真ん中で対象となっているのである。」（EN pp.488-489）

それまでの「私」と他者の二人であった状況から、第三者が現われることでその状況が変化するということは理解できる。ところがドゥルーズ＝ガタリの主張する権力の遍在を考え併せるなら、この第三者の出現がそのまま第三者の優位性を意味することにはならないのではないかと思われる。サルトルの考えは次のようなものである。「第三者の出現に私は、同時に、私の可能性は奪われていると感じ、そしてまた同時に他者の可能性も消滅した - 可能性であることに気付くのである。状況はだからといって消滅することはないが、私の世界からも他者の世界からも外に逃げ去り、客観的な形で第三者の世界の真ん中で構成される。この第三者の世界で状況は見られ、判断され、超越され、利用されるがその結果二つの逆の状況の均等化が生じる。私から他者に向かったり、あるいは逆に他者から私へと向かう優先権の構造は最早存在しない、何故なら我々の可能性は第三者にとっては（下線原文）同様に消滅した - 可能性だからである。」（EN p.489）

ここにおいて理解できないのは「私」と他者との間に生じていた対立が何故第三者との間に生じないのかという疑問があるからであり、第三者の一方的とも言える優位性は存在しないのではないかと思われる。そもそも「私」が他者に対して主張したい正当性が他者に認識されていない状況において、第三者は確実にその正当性を認識できるとは言えないだろう。また第三者はその状況においてあたかも裁判官のような役割を担うとは限らないのである。現実的に第三者は「私」に与するかもしれないし、他者に与するかもしれない、あるいは全く中立的な立場をとり「私」の正当性には全く関与しないかもしれないのだ。ここにおいて現実とはそのようなものだとして無反省的に現実を受け入れるのではなく、何らかの対応を試みる時、そこで生まれる思考は決して現実と対立して存在するのではなく、「私」という存在の中で生まれてきたものであり、「私」という存在が現実の一部を構成しているように、その思想も現実を構成していると言うべきである。つまり現実とは外的世界と理解されるために、現実と「私」の内面といったものはあたかも二項対立的に成立するようでありながら、それでは「私」がこの現実に存在していて何らかの関与をしているという事実を見逃すことになってしまう。言い換えるならば、現実とはその領域として対象として捉えられる様々な現象だけではなく、思考との複合的もしくは総体的な世界と言うべきである。これは何も世界の変革という大がかりなものでなくても、日常的に何かの刺激を受けそのことによりある種の感情なり考えなりが生じて、その結果それなりの行動に出るということで、現実は構成されていくということである。実際に現実に客観的に存在すると思われている貨幣にしても、結局のところは我々の価値観という極めて抽象的なものの表われであるという事実からも理解されるだろう。我々の思考が現実の一部を形成するというのなら、我々の中で複雑に絡み合う現実についての理論が必要となってくるであろう。ただこの場合主観と客観とが絡み合っている状態にも拘らず、現実を対象として捉えるためには、つまり現実との合一化された状態を抜け出すためには、現実を否定し続け、そのことによって自らを主体化しなければならない。この場合現実を否定するからといって、全面的に廃棄してしまうことはできない。何故なら主体とは外部にあるもののいわば寄せ集め

のようなものであり、仮に現実を無化してしまえば主体も同時に消滅してしまうからである。例えばこの現実と全く同じ世界が別にあるとしたらという仮定でものごとを考えることはできるが、全く別な世界が存在するとすれば、自分がどのようになっているか想像することはできないだろう。自分だけは今のままで世界だけが変わるという SF 的な発想における自分は、依然として今のこの現実に存在しているのである。我々が心身ともに快適な生活を送っていれば、我々は自らの身体の存在を忘れてしまうことになるだろう。否定されるべき現実は、我々の欲望やその対象を明らかにしてくれる。従って否定されるべき現実というのは、我々の中にあって現実的なもの、ラカンの言う現実界に遭遇する機会を与えてくれるのである。つまりとりあえずはどうしようもない現実といったものとの衝突がなければ主体は存在しないと言えるだろう。仮に何でも満たされていれば、自らの欲望がいかなるものでどこにあるのかさえ認識できないだろう。従って論考の出発点としてあるのは、自分ではどうすることもできない他者性や理解不可能なものとの遭遇があると認めることである。このどうすることもできないという思いが主体の萌芽であり、それが主観から生み出されたものであるとするなら、それを徐々に排除していくことによって、現実とは何かが構成されていくことになるのである。

第七章　ナジャは果たしてシュルレアリスム精神の具現化なのか

『ナジャ』の前段階を形成する『失われた足跡』の中に収録されている「新精神」において、ブルトンとその友人であるルイ・アラゴンとアンドレ・ドランは街の中で不思議な謎の女性と出食わす。三人が同時にというわけではなく、各自がそれぞれの体験としてその出会いを語るのである。その女性が気になって仕方のないブルトンとアラゴンはその後、街中を探し回るのであるが失敗に終わってしまう。この後日談が語られていないことから考えると、この謎の女性に出会ったのはこの時だけということになりそうだ。共同主観性の概念を用いるならば、三人が出会ったというのであり、その様子も同一人物を指していると思われることから、謎の女性は実在したと言えるだろう。ただどこの誰ともわからないという不思議さがあることから、本当にいたのかという思いが生じるのは必然的で、従ってそこに想像力をつぎ込む余地というのは十分にあるのだ。つまりその女性は謎の女性として生き続けることになる。ところが『ナジャ』におけるナジャは、ブルトン自身何度も会っていて、ナジャ自身によって語られる過去の生活や家族関係からまさに実在の人物として存在する。その上でブルトンはナジャをどのような人物であるかと問うのである。確かに会った当初はあたかも探し求めていた謎の女性と出会ったという喜びと驚きがない交ぜになったような思いにとらわれていたであろうが、ナジャを理解できないという思いも強くなるにつれて、ナジャを改めて問い直すということになるのだ。それは 10 月 12 日の恐らくは夜に起こった出来事で、ナジャはそのことを 10 月 13 日にブルトンに語って聞かせることになるのだが、それを聞いてブルトンとしてはそれまで抱いてきたナジャへの思いが脆くも崩れ去る寸前に至るわけで、これに伴ってブルトンは「本当のナジャは誰なのか」（PI p.716）という問いを立てることになる。この問いは選択肢として提示されていて、つまりシュルレアリスム精神の具現化とも言うべき霊感に満ちた女性なのか、それともただの街の女なのかということである。ブルトン自身答えはわかっていて、要するにナジャ

とは街の女にすぎないということなのである。ただそれを答えてしまっては全ては終わってしまうわけだし、ブルトンが『ナジャ』を書く意味もなくなってしまう。それではここにおいて何が起こったのか。ここにおいて問いを発することの意味は、問いを言葉として発することで、ナジャの存在は単なる現実的な存在であることをやめ、いわば括弧の中に入れられるのである。このことによってナジャが10月12日に起こした品性を問われるような出来事は致命的であることを免れるだろう。このブルトンによって発せられ、ブルトンにしか発することのできない問いとは答えを求めるものではなく、その選択肢のうちのいずれを選ぶかはブルトン次第であることを明らかにするのである。我々第三者からすれば、実際に会ったことはないとはいえ、ナジャを街の女として捉えることに同意するわけだし、それがまさに客観的事実であると言うことができるだろう。例えば「新精神」において問題となっている女性が謎の女性であるとしながらも、テキストにおけるアンドレ・ドランの発言に注目してみよう。「チェックのスーツだ、と彼は大声で言った、でも僕はサン - ジェルマン - デ - プレの鉄柵の前で彼女と出会ったばかりだ。彼女はある黒人の男と一緒だった。彼は笑っていたし僕は彼が一字一句変えずに言うと『ちゃんと変わらないといけない』と言っているのをまさに聞いたんだ。その前に、僕は遠くからこの女が他の人たちをさえぎっているのを見たことがあったし僕は彼女が僕にも声をかけてくるのじゃないかとしばらく待っていたんだ。このあたりで彼女を見たことはないというのは確かだけれど、僕はこの界隈の全ての女の子たちは知っているんだ。」（PI p.258）

いささかその女性に興味があるとはいえ、ドランの発言が客観的現実というものに近いと言えるだろう。ブルトンはナジャとの出会いの後ナジャの物語を書き始めるのであるが、当初雑誌に発表した段階では10月6日の部分だけが公表されていたのである。これなら「新精神」との繋がりも明確であるし、ナジャはシュルレアリスム精神の具現化として無傷であったのだ。それでは何故街の女にすぎないのではないかという記述が明らかになるのか。それはナジャ自身が最早それ自体ではシュルレアリスム精神の具現化でも何でもないからである。しかしそれならナジャは一体何だというのか。この問いに答えるために『ナジャ』の10月6日の「新精神」に書かれた出来事に関する記述を見てみればいいだろう。「この一日の短い出来事の物語は注釈なしで済ますことができると私には思われたという事実にナジャは驚き失望している。彼女は私がその物語にあるがままに帰している厳密な意味と、そして私はそれを公表したのだから、私がそれに差し出している客観性の度合について私に早く説明するようせき立てる。私はそれについては何も知らないということ、このような領域において確認する権利だけが許されているように私には思われるということ、もし背信というのがあるなら、私はこの背信の最初の犠牲者だったのだということを答えなければならない」（PI p.691, p.693）。

つまり「新精神」において謎の女性は確かに三人の男たちによって出会うことになったということで、実際に存在したということは明らかであるにも拘らず、探し求めてもいなかったということから単なる錯覚と変わりのない位置を与えられている。つまりどういう女性であるか以前の問題として、その謎の女性は本当に存在するのかという思いにとらわれてしまう。ところが『ナジャ』においてナジャはどのような人物であるかは別として存在することが明らかなのである。ここにおいてラカンの言う「女性は男性の症候である」という有名なテーゼを思い

起こしてみよう。つまり女性なるものは存在せず、男性によって欲望の対象となることによってはじめて女性として存在するのだということであるが、それはあくまで女性性についての概念であるかのように思われるが、この症候をシュルレアリスム的な意図のもとに読み解くなら、ナジャがナジャであるためにはブルトンの欲望が存在していなければならないということがわかる。つまりナジャはブルトンによってナジャとなるのである。そしてこのことはブルトン自身の欲望についてもその真理を明らかにすることができる。それは症候と主体との関係が逆転するのである。つまりナジャはブルトンの欲望によって一人の女性であったし、かつ更にはシュルレアリスム精神の具現化となっていたのであるが、仮にその欲望を失ってしまうのならブルトンは自ら拠って立つ基盤を喪失し解体してしまうことになるのである。それ故ナジャはブルトンの症候であるとするラカンのテーゼを読み換えたものが、今度はブルトンはナジャという自らの症候を通じてのみ存在することができるという結果になるのである。少なくともシュルレアリスム的にということになればそうである。つまりブルトンのシュルレアリストとしての存在根拠は、ナジャに対するブルトン自身の症候に基礎を置いているということであり、ナジャなしには成立しないものであるのだ。従ってブルトンはいかにシュルレアリスムの理論をもってしても自身では存在することができず、その存在根拠はナジャにあるのだ。一方ナジャはシュルレアリスム的には存在しない。確かにブルトンから見ればナジャはシュルレアリスム的存在なのであるが、ナジャはシュルレアリスムには依存しないのだ。ナジャがブルトンの症候であって、ブルトンに依存している限り、ナジャはシュルレアリスム精神を体現しなければならないという要請から逃れられないでいる。『通底器』において X がブルトンに対してナジャの精神錯乱の責任を指摘している箇所から見受けられるように、ナジャはブルトンに依存しながらも、その関係を逃れ出ていく何かがあるのだ。ナジャを失うことによって、ブルトンはその症候の根拠を喪失することになるのであるが、ここにおいてブルトンにとっての試練が存在することになる。『ナジャ』のテキストにおいてナジャの物語を書き終えた後に、そのテキストをいかに扱うかいかに完成させるかについて苦慮していたのは、要するにこの点に理由があるのだ。オットー・ヴァイニンガーが『性と性格』において用いている、男性が自らの欲望を浄化し純粋な精神性を獲得すれば女性は消滅してしまうだろうという論理展開と同様のものが考えられるだろう。つまりブルトンは実際にナジャが存在することに依存していくことで、自らのシュルレアリスム的存在を自らの症候に基礎を置くことができるのであるが、その欲望を克服することで自らのシュルレアリスムの精神性を高めるというわけである。しかしそれは必然的結果としてナジャをシュルレアリスム的にあれという要請から解放し救済することを意味するとともに、ナジャを消滅させてしまうことであり、ブルトンにしてみれば容易に受け入れることができないものであったのだ。

第八章 「私」は現実において他者に承認されていなければならない

ブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私は誰か。」（PI p.647）という問いを投げかけるし、更に進んで自分が他の人たちとは違った何かを知ろうとしていることから、その自己同一性の問題は『ナジャ』において重要な位置を占めているということは言える。そしてこのテキスト

中においてこれが答えだとして明確に示されているわけではないから、この問題が宙吊りにされてしまったか、あるいは解決不能な問題として考察しないことになったのかと思わせる程である。しかし答えは意外なところに見出せるのだ。それは『ナジャ』のブルトンとナジャが初めて出会った10月4日の記述の最後にある。ブルトンはナジャに対して「あなたは誰か」（PI p.688）という問いを発し、ナジャが「私はさまよえる魂です。」（PI p.688）とよくわからない答えをしたその後の箇所である。「我々はラファイエット通りとフォブール・ポワソニエールの角にある酒場で翌日また会うことについて合意する。彼女は私の本を一冊か二冊読みたいようで彼女がそれに抱き得る興味を率直にも疑うだけいっそう強く望むことになるだろう。人生は書いているものとは別なのだ。更にしばらくして彼女は私の中で彼女の心を打っていることを私に言うために私を引き止める。それは私の考えにおいて、私の言葉において、私の存在の仕方全てにおいてらしいのだが、私が私の人生で最も心を動かされたほめ言葉の一つで、気取りのなさ（下線原文）なのだ。」（PI p.689）

ブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私は誰か」という問いを投げかけながらも、その後のテキストにおいてそれに言及することはない。あたかもそのような問いなどなかったかのように物語は進行していて、ナジャとは誰かといった方に我々の関心が向くように仕向けている。しかしあくまでブルトンの関心はブルトン自身にあるのだ。それでは何故ナジャとは誰かという問いかけがなされるようになるのか。それはナジャこそブルトンのよさを承認した人物だからだ。ブルトン自身単なる小説上の起動装置として自己同一性についての問いかけをしたのではなく、実生活においてもそのような問いを発し続けていたのだ。従ってブルトン自身が自分の中に空虚を自覚していたわけで、自分が何者であるのかを特定したいという欲望に駆られていたのだ。そしてそれも大がかりなものである必要はないのだ。むしろブルトンの関心はナジャにあるかのように装っている。ここには二重の意味があって、ブルトンの本当の関心はブルトン自身にあってナジャにはないこと、ただブルトンのことをヘーゲル的な意味で認めたということでナジャには何かしらの関心があり、ナジャのことを更によく知ることによってブルトン自身についてもっと新しい発見があるのではないかということだ。ブルトンの自己同一性の問いかけは何か大きな哲学的な問題のように思われ、従ってそれに対する答えは一つの理論を提示しなければならないように感じられるが、実はナジャによって認められた気取りのなさがブルトンにとって確実な自己同一性の根拠となるのである。というのも気取りのなさはブルトン自身がそう思われたいと思っていたことであるからだ。ブルトンにとっての自己同一性とはブルトン自身が自分をどのように見てもらいたいかという欲望との関数であって、仮にナジャが洞察力のある人物であったとするならば、初めての出会いにも拘らず、それまでのブルトンとの会話を通してブルトンが他人にどう見られたがっているかを認識したかもしれないのである。ここにおいてブルトンにとってナジャは愛する一人の女性でもシュルレアリスム精神の具現化でもなく、自分をヘーゲル的に承認した人物として位置付けられることになる。ブルトンは気取りがないということを認めたナジャは、次にどういう資質をブルトンに見出すのか。ブルトンの関心はそこにあるのだ。気取りのなさは始まりなのである。そしてここで更に問題であるのは、ブルトンは本当に気取りがないかどうかという検証は全く必要ではなく、ブルトン

はナジャによる承認をまさに架空の話ではなく現実として認めてしまうということにある。客観的であることの困難は既に指摘したところであるが、それでも現実的な要請として客観的であることが求められ、その次善の策として共同主観性ということが出てくる。つまり自分一人だけ思っていたのでは単なる勘違いや錯覚かもしれないのであるが、他の人も同じように考えていたというのであれば、それで全て解決というのではないにしても、というのもどちらも錯覚していたということもあり得ない話ではないからだが、それでも客観性には少しは近付くことができるのである。従ってブルトンが自分の欲望として抱いていた思いと同じものをナジャが認めたということはそれだけでその思いは現実として成立してしまうということである。ただそれは単なる架空の話ではないということから現実の話として受け取ることができるのであるが、というのもそのような思いをブルトン自身が抱いていて、かつナジャによって承認されたという事実は他ならぬ現実のものであるからだが、これを客観的現実つまりブルトンが果たして気取りがないかについては何ら検証されていないし、またどのように検証するかというのもいささか難問であるということもあり、事実として認めることの困難を考え併せるなら、ここで問題になっている現実とは欲望が生み出した物語であるということが言える。ここにおいてブルトンが「私は誰か」の問いの答えとして、ブルトンは気取りのない人物であるとあたかもそれが究極の答えであるかのように語っては何ともつまらない結末になってしまう。ブルトンは気取りがないと認められたことに喜びを見出すのであるが、ブルトンにとってすべきことはその答えはあたかもなかったかのようにして次に繋げていかなければならないのだ。もちろんブルトンの意図するところは、ナジャから次はどのような承認を得られるかということであり、そのためにブルトンはナジャに会い続けるのである。ところがナジャは風変わりな女性であって、言っていることもよくわからないし、つきあい続けるのにも苦痛を感じるようになる。10 月 12 日以降の反省的な記述の中で、ブルトンはナジャが「その言葉の十全の意味において私を神と捉え、私が太陽であった（下線原文）と思うこともあった」（PI p.714）と明らかにしているが、同時に「彼女にはスフィンクスの足もとで雷に打たれた男のように黒く冷たく感じられた」（PI p.714）とも書いている。そしてこれらの記述によってブルトンは自己同一性を見出したというわけでもないのだ。そしてこれ以外にナジャがブルトンを気取りがないと認めたような記述は存在しないのだ。つまりブルトンは自己同一性を見出そうとしてナジャの承認を求め続けていたのであるが、その目的は達せられなかったようだ。このよくわからない展開の中で自己同一性についてブルトンは、ナジャが自分について気取りがないといったようなことを更に求め続けることになる。ナジャは精神病院に入ることになり、ナジャの承認は最早ブルトンを満足させるものとはならないし、新たに愛人となったテキスト上では「君」と表現されているシュザンヌ・ミュザールとの関係がうまくいかなくなったことから、ブルトンは承認を更に求めるというよりも、その時点でそれまでの出来事を振り返ることになる。そしてナジャによって気取りがないことを認められたという事実に自己同一性の支えを見出すことになるのだ。つまりこのナジャによる承認を起点としてブルトンの物語は始まるというわけだ。ただブルトンにとってこれはあくまで事実であることを強調したいのだ。序言の中に出てくる「《ありのままにとらえられた》記録を全く歪曲しないように気を配る」（PI p.646）というのもその点

を強調するためである。ただこのことによってブルトンの自己同一性についての問題は解決したというわけにはいかない。しかし当初は空虚と思われた中心がこのナジャによる承認によって少しずつ埋められつつあるという事態は忘れることはできない。そのためブルトンはナジャによる承認を10月4日の出会いの記述の最後にさりげなく付け加えることになるのだ。単にテキストを読み進むだけでは大したことではないと気にもとめないような形で、いわば物語の進行にとらわれる読者の眼から見えなくするように隠すことで表立たないように配慮はしているが、その実ブルトンにとって注目してほしいことなのである。これをあたかも究極の答えであるかのように提示してしまえば、もうその先、向こう側はないということを明らかにしてしまう。示されるべきは、まだこの先に求めるべきものがあるのだと思わせるようなものでなければならない。しかし実際の出来事としてその先はないということなのであるから、まさにその空虚な部分についてその空虚であることを感じさせず、むしろ何かあるという風に思わせる物語を用意しなければならない。これはという承認も得られず、自己同一性が宙に浮いた状態がまさに現実であるとするなら、常に物語によって補完されることが求められるのである。

第九章　「私」が語る歴史は物語である

『ナジャ』のテキストにおいてナジャの物語の部分、特に日記形式で書かれている部分は歴史的現在が用いられていて、まさにその場にいるかのように語られるわけである。もちろん現在のことではなく、物語の冒頭に「去年の10月4日」（PI p.683）とあり、更に注には「1926年である。」（PI p.683）と記されている。「私は誰か」と自己同一性に関する問いを投げかけるブルトンにとって、ラカンの言う鏡像段階論の他者とはとりあえず物語においてはナジャと考えられるわけであるが、このように少なくとも一年後のブルトンが1926年のブルトンをあたかも映画の中にある俯瞰的なカメラが見るように見つめているとするならば、1926年当時のブルトンも鏡像段階による「私」として捉えられるのだ。というのもラカンは「私の機能を形成するものとしての鏡像段階」で次のように書いているからである。「しかし重要な点はこの形式が私（下線原文）の心的力域を位置付けるということであり、その社会的確定より前から、虚構という線で、ただ一つの個人として永遠に還元され得ない、――いやむしろ、漸近線的にしか主体の生成に繋がらないだろうということで、弁証法的な総合の成功がいかなるものであれそれによって私（下線原文）として自身の現実との不一致を解決しなければならないのである。（中略）私の精神的恒久性というのは対応関係で更に大きくなっていてそれは人を見下ろしている幽霊や、結局のところ自動人形のようなものに人が映し出されている像に私（下線原文）を結合するのであってそこで曖昧な関係において手製の現実が完成すると思われるのだ。」（E1 p.91）

従って1927年の時点のブルトンが、1926年のブルトンを眺め思い返すことによって自己を形成していたということが言える。「私」は「今の私」ではなく、「過去の私」の中に見出されるということになる。何故このような時間的なずれが生じるのか。確かに「私」の中には「私」を定義付けるものはなく、常に外部にあるものによって補完して生きていかなければならない以上、「私自身」に関して言うなら同一時間に違う場所に存在するということが不可能である以上、時間的なずれを生じさせることで「私」が「私」に出会うということが可能になるわけで

ある。実際例えば既に問題にしたサルトルの対他存在についても同様で、私と他者との対立がありその果てに対他存在が決定されると考えるなら、瞬時に全てが認識されるということは不可能なのである。更に言うなら、これは我々の能力の欠如によるものではなく、例えば貨幣が価値を持つのは流通によってであるということを考え併せるなら、何らかの意思伝達という要素があり、そこには動きが認められる以上時間がそこに介在するのは必然的なのである。つまり「私」は「私の過去」についてどのように反省的に捉えるかということなのである。そしてここにおいて生じてくるのが、「私」そのものではなく、「私」について語る事柄であって、それはまさに物語に他ならない。例えば我々が夢を見てそのことについて他者に語る時、夢そのものを提示することはできないわけで、それについての話をすることになる。その場合決して嘘をついているとか作り話をしているとかいうのではないのだが、本人にとっても他者にとっても理解しやすいように一つの物語として仕立て上げるのである。恐らく夢そのものは何らかの映像の断片のようなもので、だからこそ見ている本人には奇妙に思えるし、現実ならあり得ないようなことも起こってくるのだと思われるが、その断片の集積では何のことかわからないから、それを繋げていく段階で一つの物語となるように再構成するのである。決して嘘をついているとか作り話をしているとかいうのではなくても、その物語が必ずしも真実ではないのは、語られていない部分が存在するからである。故意に言い落としたというわけではなく、完全に全てを言い表わすことは不可能だからである。ただ何を語り何を語らないでいたかという点は重要であって、そこに夢を見た本人の欲望が反映されていると見て取ることができる。これはどのような物語として提示しているかについても言えることであって、その物語の中で自分がどのような存在となっているかについても自分の欲望が反映されている。つまり自分がどう見られたいと思っているかがわかるということである。そもそも記憶というのは曖昧なものであって、何も嘘をつこうとしているのではなくても、事実を忠実に再現しているとは言い難い。その場合何かしら自分にとって都合よくとまで言わないにしても作り上げられているということは十分言えるのである。ブルトンが『ナジャ』について用語を適正にするとか流暢なものにするとかいった目的で表現に手を加えたことについても、事実の忠実な再現ということは最早あり得ず、物語としての完成度を狙っているという風に思われる。問題はむしろそのような表現上のことではなく、時を隔てて改めて思い出されるものは何かということなのである。つまりブルトンにしてみれば現在の自分自身よりも『ナジャ』のテキストの中で語られているブルトンの方が余程自分らしいことに気付くということである。ラカンは「精神分析における語りと言語の機能と領野」において、「この存在は想像の産物である彼の作品にすぎなかった」（E1 p.125）と言っている。もちろん『ナジャ』の中に登場するブルトンが真のブルトンであると言い切ることはできないにしても、語られることによってテキストの中のブルトンは現実味を増していくことになる。このことによってブルトンは、フロイトの言う「無意識的なものを意識に移す」という変換作業を行なっているのである。ここにあるのは事実を明らかにするとか記憶の忠実な再現といったものではなくて、ブルトンにとって納得のいく「私」が再現されればいいのである。これこそブルトンが物語の冒頭において「私は誰か」という問いを投げかけたことに対する自分なりの回答だということになるのである。『ナジャ』において書かれた事柄が

真実であるかどうか我々には確かめようがないし、そもそも真実であろうとなかろうと指摘する意味がないのである。重要なのは『ナジャ』のテキストの中にブルトンの納得した「私」があるということなのである。そしてこの「私」の真実の姿というのは、ブルトンが自分一人で納得して終わりというものではなく、誰かに向かって投げかけられたものでもあるということを知るべきである。ブルトンは『ナジャ』のテキストを完成させる前に、その原稿をテキスト上では「君」と表現されているシュザンヌ・ミュザールに見せていたということであり、自分がいかなる人物であるかということは対女性に向けられたものであって、これこそブルトンの欲望であると言うことができるだろう。ラカンは次のように書いているのだ。「というのも言語の機能は情報を与えることではなくて、思い起こさせることだからである。／私が話し言葉の中で探しているものは、他者の応答である。私を主体として構成しているものは、私の問いかけである。私を他者によって認識してもらうために、私は過去においてあったことを未来においてあるだろうということを目指してしか発言しない。その他者を見出すために、私はある名前で彼を呼ぶが私に答えるためには容認するか拒否するかしなければならない。／私は言語の中で自己同一化するが、ただ客体として何が何だかわからずにである。私の歴史＝物語において実現されるのは、かつてあったことが今は最早ないからということでの定過去（単純過去）ではなく、私であるものの中で過去にあったことということでの完了形ですらなく、私が現在そうなりつつあるということのために将来においてそうなってしまうだろうということでの前未来なのである。」（E1 p.181）

つまり「私」はこれから他者の承認を得るべく「私」がいかなる人物であるかを過去のことを思い出しながら語るわけであるが、それは真実というものではなく、それは既に消滅してしまっているわけであるし、今の自分を提示しようにも時間が必要になってきてできないということになる。つまり未来の「私」は過去となった自分を捉えて提示し、他者の承認を得ることになるであろうというわけだ。もちろんそのことによって「私」は全てを語り尽くしたということにはならない。しかし語り尽くせていないと思うと同時に、何かしら語ろうと思えば語ることができるのではないかということが、今の「私」にはできないにしても、将来においては可能になるのではないかということである。ここにおいてもととなっている事実というものは変わらないはずであるから、変わるのはそれを再現する時に成立する物語の方なのである。その物語において過去の「私」が最早存在していないにも拘らず、未来においてその時の「私」はこうであったと違ったものとして提示される可能性もあるのだ。つまり物語が書き換えられるという事態が常に存在するのだ。

第十章　現実についての物語

ブルトンが『シュルレアリスム宣言』において現実世界を否定するのは、それがブルトンの自己実現を妨げるからである。つまり自己実現を妨げるものとして現実を捉えるのである。従ってブルトンにとっての現実とは、ブルトンの視点で語られる物語にすぎないのである。逆に言うなら、この現実という物語は「私」を説明もし根拠として機能することもある。つまり現実とはサルトルの言う実存以前に常に既に存在するのである。このように考えるならば、現実

について考える時、それは物語を通してしか可能にならないということである。この物語は現実を相手に不断に戦うことによって成立する。この物語の出発点は、現実に対して嫌悪感を覚えることである。そして戦いに勝利するためには、まずは現実を知らなければならないのだ。しかしここにおいて現実とは客観的真理というわけではなく、ブルトンにとっての自己関係的なものなのである。従ってそれが現実を正しく捉えているかについて、事実に関する正確さを問題にするのではなく、ブルトンが主体的立場にどのように作用するかによって判断されなければならない。それは恋愛を例として出せばわかりやすいだろう。ある女性が自分にとって愛の原因であることはその主体にとって真実ではあっても、一般にそれが真理と認められることはないというわけだ。この現実と戦うためにブルトンが武器として考えたのが想像力である。「とても慎ましいというのが現在では彼の宿命である。」（PI p.311）とか「彼がどんなおかしな出来事に加担したのか」（PI p.311）とかいったようなことで現実の認識はあるのだ。これに対してブルトンは次のように書く。「我々が受け継いでいるとても多くの醜悪さの中で、精神の最大の自由（下線原文）が我々に残されていることはしっかりと認めなければならない。（中略）想像力を隷属状態に追いやることは、たとえ人が大ざっぱに幸福と呼んでいるものに関わるだろうとしても、自らの奥底にある、至高の正義として見出す全てのものから逃げることである。ただ想像力だけがあり得る（下線原文）ものを私に説明してくれ、そしてそれは恐ろしい禁忌を少し取り除くのに十分である。」（PI p.312）

つまり現実と戦うそれも想像力でもって戦うとするなら、つまらぬものとして捉えられた現実の物語を想像力によって魅力ある物語に書き換えていくという他ない。現実はつまらないとする物語を書き換えるにはどうするか。ここにおいて注目すべきなのが単純な物語の成立を妨げている要素の存在であって、物語の進行や予定調和的な結末に抗う働きをしているのである。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において、文学を例に引きながら既に結末が見えている小説のつまらなさを指摘している。「作者は性格を非難し、そして、性格が与えられると、主人公を世界中を諸国漫遊させるのだ。何が起ころうと、活動や反応は見事に予定されていて、この主人公は、彼が対象となっている思惑を失敗させるように装いながらも、裏をかかないようにする義務がある。人生の波は彼を運び去り、騙し、落ちぶれさせるように見えることもあるが、彼は相変わらず作られた（下線原文）この人間の型の支配下にあるのだ。」（PI p.315）

全ては決まっていてそれがつまらなさの原因であるとするなら、その予期することができない要素としてブルトンは不可思議を持ち出すのだ。文学を例にとりながら次のように主張している。「文学の領域において、不可思議だけが小説のような劣った様式に属している作品や漠然とした方法で逸話の性質を帯びている全てのものを豊かにすることができる。」（PI p.320）

これこそがつまらない現実を魅力あるものにするのであって、ブルトンはシュルレアリスムの名においてこの不可思議について語るのである。確かにつまらないとされる現実もあると同時に、その現実において不可思議な要素も確実に存在することは、たとえ日常的ではないにしても認めなければならない。つまらない現実というものが主流を占めているのなら、不可思議の要素は付随的もしくは突発的に生じるのであって、場合によってはそれと気付かずに我々は見逃してしまうことにもなる。『ナジャ』を例にするなら、表面的にはブルトンとナジャの出会

いと別れの物語であって、結末において別れがあるとしても、恋愛小説として読めなくもないという体裁になっている。ところが『ナジャ』のテキストにおいてまさにナジャの物語が始まろうとする直前において、「ようやくマンゴの館の塔は飛び上がり、その鳩から落ちた、羽根の雪は全て、少し前は瓦の破片で敷きつめられそして今や真の血で覆われている大きな中庭の地面に触れて溶けているのだ!」（PI p.682）と書かれているのだ。ナジャの何かを夢見ているような状態やその発言についてはある種の症状として捉えるとしても、10 月 12 日の記述の最後でブルトンが次のように書く時、果たしてそれが現実のものであると受け取ることができるだろうか。「我々は次の列車を待たざるを得ないが、その列車は一時頃サン - ジェルマンで我々を降ろしてくれるだろう。城の前を通りながら、ナジャはマダム・ド・シュヴルーズになっていた。何という優雅さで彼女は帽子の存在しない重たげな羽根の背後に彼女の顔を隠していたことか!」（PI p.714）

映画なら幻想的な処理が施された映像として見えてくるようだが、ブルトンはこの『ナジャ』のテキスト執筆にあたって、事実をそのままに捉えて表現していると明言しているのだ。にも拘らず詩的な記述が見受けられるわけで、これこそ反文学的とも言うべき要素として捉えられるものである。反文学的であるのはこれに留まらない。ナジャが実在したことについては、マルグリット・ボネの研究で明らかになっているにも拘らず、『ナジャ』のテキストを読むたびにこれは本当に実在したものなのか、ブルトンの妄想にすぎないのではないかという思いに駆られる。それは本来小説ならあるところの他の登場人物が欠けていることにあるのだ。正確に言えばいなくはないのだが、全てブルトンだけと関わり、ブルトンによってのみ明らかにされるとか、ナジャの話の中に友人たちが出てきて、例えば三人で会っている状態はないのだ。確かにレストランで給仕をしている男も描かれるのであるが、いわば背景としてのものである。このような欠落は意図的なものであつて、ブルトンとナジャがいる現実とは確かに現実のものであるのだが、ブルトンを通してしか成立し得ないものなのである。従って他の人物がいることによって二人の世界は崩壊してしまうとまでは言わなくても、明らかに妨害されることになる。このように考えるなら、現実とはいってもごく普通の日常生活では成立し得ないということになる。そして反文学的である最大のものは、結末がはっきりしないということである。通常物語としてはどのような結果であれ、結末が読者の納得のいく形で提示されることになっている。そのことによって我々は納得してそれを一つの物語として受け入れるわけで、結末がよくわからないということであれば、消化し切れないものを感じてしまうことになる。もちろんそのような結末もブルトンの意図したところであって、ブルトンはナジャの物語以後の箇所でテキストを完成させることの難しさについて述べているのであるが、それは小説の技法上の問題ではなく、ブルトンがナジャとのことについて確かに出会ったことについては特筆すべきこととして捉えているように思われるが、最終的にナジャとどうなったかについては、要するに知りたくないという欲望が働いているのだ。これについてブルトンが自覚的でなければ、そこにはフロイトの言う抑圧が働いているのであって、ブルトンは知りたくないという事実を見落としていることになる。何故このような事態になったのか。これは要するにブルトンにとってナジャは現実においてはその機能を完了したということなのである。ブルトンはテキスト中において

「本当のナジャは誰か」という問いを投げかけるのであるが、ナジャがどのような存在であるかは問題ではなくて、ナジャがどのような人物であるかがよくわからない段階においては力を発揮することができるが、一旦わかってしまうと何の意味も持たなくなるということなのだ。従ってナジャはどういう人物であるかについて答えは明らかにされないままであるし、ブルトンもそれを宿命の状態にしておこうとするのだ。結末をはっきりさせた状態でナジャはナジャとしての力を失ってしまうのだ。従ってブルトンはナジャという女性がいたということについてはテキストにおいて明らかにしているのであるが、10 月 13 日以降になると少しの記述はあるものの、あたかも遠い過去の人物であって、その人のことについてはよく知らないといった態度すら見せている。ブルトンにとって必要なのはナジャを提示するだけで、何について言及し最終的に結論を出すことを求められているわけではないのだ。現実が物語であると言う時、まず何についての物語であるかということであり、その何についてかということをそれが意味することを問わずに提示する必要があるのだ。

第十一章　現実において何が解釈されなければならないのか

現実は物語であり、それは往々にして事実に基づいていることがあり、誤った記憶によって再構成されているということになれば、物語とは何の根拠もない作り話ということになるのではないかという疑念も生じてくるのであるが、我々が間違ってはならないのは、意味されるところは不明であるか少なくとも一義的ではないが、意味するところは少なくともはっきりしているということなのである。『ナジャ』について言うなら、ナジャがどのような人物であるかについては明言することはできないが、対象としてナジャが存在することははっきりしているということである。また仮にナジャが架空の存在であったとしても、『ナジャ』のテキストにおいてナジャは存在していると言うことができるのである。このような存在はラカンがエドガー・アラン・ポーの『盗まれた手紙』について明らかにしたその手紙の役割であって、差出人も手紙の内容も明らかにされないままその効果を発揮するのである。つまり現実は物語であるとしても、何の根拠も必要なくただ単に言葉だけによって再構成していけばいいというわけではなく、シニフィアンの部分が必要だということだ。夢を見てそれについて語る時、その夢を忠実に再現することもその意味するところを明らかにすることも不可能なのであるが、少なくとも夢を見たと言い得る以上、思い出される限りでの映像やそれによって明らかにされる出来事らしきものや言語のやりとりは提示されなければならないのだ。もちろんその対象が何であるかについても物語的に言い換えるなら主観的に切り取られるわけであって、独自につまり客観的に存在しているというわけではないのだ。例えば世界が何によって成立しているかについても科学的議論ではあってもその時代の世界観に支配されているので、つまりはそれ自体が既に何らかの考えに支配されているということなのである。我々が科学的に説明する以前に存在している世界はあり得ず、語られた世界というのは既に我々の考えとの合作ということになる。ラカンが女性は男性の症候であると言う時、それはいかにも女性であることを強調した存在について理解できるのであって、男性の症候をもたらす女性は常に既に存在するのである。このようにシニフィアンは何らかのシニフィエを求めるということで解釈を要求するわけであるし、

それは何も最終的な意味付けを要求するわけではなく、ドゥルーズ＝ガタリが言うように、あるシニフィアンは別のシニフィアンに移行し、それは更に別のシニフィアンへと移っていくということであるかもしれないのだ。従ってブルトンが現実と戦うという時、それは現実を新たに解釈するということであるかもしれないのだ。確かにブルトンは『ナジャ』において自己同一性の追求に関連して、「人生は暗号のように解読されることを望むのかもしれない。」（PI p.716）と書くわけである。しかしその試みは既に指摘したように、あるシニフィアンを別のシニフィアンに置き換えるだけのことであり、何かによって基礎付けるという試みの失敗、無根拠性に帰してしまうのである。知的な暇潰しとして推理小説を読む時、限られた時空間という領域で何人かの登場人物のうちの一人が犯人であるとする予め決められた設定は、結局のところ誰が犯人でも構わないという前提があるのだ。シニフィアンの移動によって世界が変わるわけではない。もし変わるとすれば、受け取る側の内的な問題として処理されることになる。確かにそのような内的な出来事も世界を構成する一部なのであるから、全く変わらないと言い切ることは正確ではないが、世界の枠組には大した変化をもたらさないだろう。むしろ変えるべきはシニフィアンの方なのである。この試みの一つとしてブルトンが行なったのが、本来なら結び付くはずのない二つの実在を接近させることからシュルレアリスム的イメージを出現させるという試みである。『シュルレアリスム宣言』においてブルトンはピエール・ルヴェルディのイメージ論を援用する形でその説明をしているのであるが、そこにあるのは「イメージは比較からは生まれ得ず多かれ少なかれ遠く離れた二つの実在の接近から生まれ得るのだ。」（PI p.324）という考えで、この中で「実在」とはフランス語で現実をも意味する réalité が使われているのだ。ちなみに同様のイメージ論をブルトンは『通底器』においても展開していて、それは「互いにできるだけ遠く離れた二つの対象を比較する、あるいは、全く別の方法によって、唐突ではっとさせるやり方でそれらを対峙させることは、詩が切望し得る最高の務めである。」（PII p.181）と書かれているのだが、この中で「対象」となっているのがフランス語で objet であり物ともとれる言葉である。つまりこのように解釈によって世界を変革するのではなく、実在する側、言葉で言えばシニフィアンの方を変えていく必要があるということである。そして新たに何らかの物を作るということが困難であるとするならば、その配置を変えてしまおうということである。仮にこのような配慮は必要ないということであれば、生きていく上において障害となる現実は全て主観的な、つまりは自分の内部にある還元不可能な他者性を認めるということであり、我々は独我論に陥ってしまうだろう。『ナジャ』にしても「新精神」にしても、そこに登場する女性が果たしてブルトンの求めるような女性であるかどうかは別にして、つまりはただのつまらない女性であったとしても誰かが存在することは絶対条件なのである。その女性に対して何らかの解釈を加えていくということは自由であり、想像力を発揮することができるということである。つまりここにおいてラカンの言う現実界のかけらのようなものが必要であって、それを対象としなければ我々は想像力を発揮することができないのである。このような現実界のかけらは恐らく椅子に座って外を眺めるなり思いに耽るということをしていては出会うことのないものであり、いわば偶然性に依存していると言うことができるだろう。このように現実と戦うという姿勢をとるブルトンにとって可能な方法は二つあって、一つは既にあるも

のに対して自らの欲望に沿って解釈していくということであり、もう一つは解釈すべきものとして新たに言葉を作り上げることである。前者における限界は何もないところに解釈を加えていくことは不可能であり、何らかの現実界のかけらが必要であるということだ。従って解釈されるべき対象としての言葉を作り上げるということが考えられる。これは何も造語ということではなく、マルクスの「経済学批判」にあるように、商品の価値という抽象的なものが商品の客観的構成要素となり現実を変えていくということに見られる現象と同様である。言葉だから実体を持たない空虚なものであるという指摘は間違ってはいないが、貨幣も同様の働きをしていることから現実の客観的構成要素となっているのである。この解釈されるべき言葉を生み出しているのがブルトンによれば詩人であり、ブルトンは『通底器』において次のように書いているのだ。まず現実の変革と解釈についてである。「そういうわけで我々は総合的な取組み方を思いつくことに成功するわけでここで世界を根本的に変えようとする欲求とできるだけ完全にそれを解釈しようという欲求とが両立されているのである。この取組み方は、我々が数年前からそれに固執してきた者であり、それは完全に正当であるとあくまでも信じるのである。（中略）我々の強い願望とは、逆に、破壊できない分岐点、それが本当に破壊できないものであるためにその秘訣を熱狂的に探し求めることになった分岐点を使って、この変革の活動をこの解釈の活動に結びつけることなのである。」（PII p.193）

そして次に詩人たちの果たすべき役割についてである。「そういうわけで我々が、主観性に関していくらかの価値を持った生き生きとした資料を自由に使えるために我々が持っている最後の機会が失われる。これらの状態においては、私はほとんど詩人たちしか当てにせざるを得ない――彼らはまだ何人かいる――この欠落を少しずつ埋めるためにである。是が非でも、数世紀が続いた後、受け入れることができるのが詩人たちであり、人間を全世界の真ん中に戻し、意気を阻喪させる出来事から一瞬人間を分離し、人間の外にある全ての苦しみや喜びのために人間が決意と反響の限りなく完全になり得る場であることを思い出させることが可能な衝撃を期待することが可能なのである。」（PII pp.207-208）

詩人たちが声を発すれば、それまで心の奥底に潜んでいたものがまさに現実のものとなり、我々の手の届く所に存在するようになるのだ。

終章

ブルトンが『シュルレアリスム宣言』において超現実について書く時、夢と現実がいわば弁証法的に超現実として成立するということであるが、ここにおいて夢という物語と現実という物語が超現実という物語へと変化すると読み換えてみることは可能であるか。既に指摘したように、夢をそのまま映画のように再現することは不可能であって、我々はそれについて語ることしかできないのである。この場合、このような夢であったとその内容を明らかにするとともに、何故だかわからないがとか奇妙なことにという個人的感想とともに、これは何を意味するのかという知りたい欲望から何らかの分析も付け加わることになるのが通常である。つまり要は我々の認識の対象となるには物語にならざるを得ないのである。また現実についてもこれまで考察してきたように、我々に捉えられた段階で物語となるのである。従って夢という物語と

現実という物語が融合するとなると、必然的に超現実も物語であることを免れないということになる。また『シュルレアリスムと絵画』において超現実を現実との関係で捉える時、つまり「超現実は現実そのものの中に含まれるであろうし、そしてそれに対して上部にも外部にもないだろう（中略）また逆も正しいのであって、というのも容器はまた中身でもあるだろうからだ。」（PIV p.404）と書く時、超現実という物語は現実において語られることになるし、現実という物語において超現実について語るという風に読むことができるのである。物語である以上、欲望の入り込む余地は十分にあって、むしろ物語はそういう欲望の受け皿であるかもしれないのだが、このことによって物語は容易に別の物語へと変形されていく。ここにおいて問題とすべきなのは、物語が書き換えられたという点にあるのではなく、そこに入り込むことになった欲望の存在を知ることである。というのも欲望それ自体がその世界を構成しているとも言えるし、少なくとも一部であることは明らかだろう。これについては夢についてのフロイトの理論を参照してみればいい。夢を参考にしつつ現実をいかにして超現実に近付けていくかについてブルトンが考察を重ねている時、そこで問題になっているのは欲望がどのようにして表現されるかということだったのだ。つまり夢の表現を学ぶことができれば、現実を少なくとも物語として超現実に近付けることは可能だったのである。『ナジャ』を読む限り、ブルトンにとっての現実もブルトン自身の欲望の発揮ということから、超現実の色合いを帯びることになるのだ。そしてまたブルトン自身『狂気の愛』において言及しているように、至高点つまり超現実的なものがどういう感じの状態であるかについて、現実において知識としてではなく体感的に知っているということであり、現実にいながらにして超現実を体験するという、場合によっては錯覚かもしれない感覚がある以上、ブルトンが現実の解釈だけではなくいかにして物語るかという時点において、自らの欲望をその方向に入り込ませることは可能であると言うべきである。ただ物語といっても何でもありの世界ではなく、欲望を形成するラカンの言う現実界のかけらのようなものが必要となり、言葉が指し示す事実的真理との一致が求められるのである。そしてその意味で、これは関係主義的ではなく、実体主義的な考え方として捉えられることになるだろう。

注

引用文の後で示されている略記号は以下の文献を表わしている。イタリック体は下線で、引用符 guillemet はそのまま使用した。尚、引用文は全て筆者の訳による。

（PI）André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, Gallimard, 1988

（PII）André BRETON, *Œuvres complètes II*, Pléiade, Gallimard, 1992

（PIV）André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Pléiade, Gallimard, 2008

（PS）Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

（SG）Jean-Paul SARTRE, *Saint Genet*, Gallimard, 1952

（EN）Jean-Paul SARTRE, *L'Être et le néant,* Gallimard, 1943

（MC）Michel FAUCAULT, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966

（SP）Michel FAUCAULT, *Surveiller et punir　naissance de la prison,* Gallimard, 1975
（CS）Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, folio, Gallimard, 1987
（E1）Jacques LACAN, *Écrits 1*, points, Seuil, 1971